奈良県立医科大学　戦略的医療情報連携推進講座

なら医療DX通信

2025
AUGUST
Vol.4

PHR(Personal Health Record)
～そこから見える医療の新しい常識～

1. はじめに

個人の健康・医療情報を電子的に管理・活用する「PHR(Personal Health Record)」は、国民の健康増進と医療の質向上に不可欠なツールとして国が普及を強力に推進しています。しかし、奈良県内におけるその活用は、まだ緒に就いたばかりというのが現状です。PHRの導入は、単なる国民向けサービスに留まりません。それは、これまでの医療情報の常識を根本的に変え、医療の質の向上、業務の効率化、そして何よりも持続可能な国の医療に向けての「戦略的投資」となります。今回は、PHRがもたらす多角的なメリットと医療の未来を切り拓く可能性についてご紹介します。

2.奈良県の医療DX、次なる一手は「PHR」

電子カルテの導入が進み、電子処方せんへの対応が次のステップとなる中、医療DXの真価が問われるのは、その先の「PHRの活用」にかかっています。県民1人1人がこれまでの検診の情報、日々の健康情報(血圧、血糖値、歩数、食事など)や、複数の医療機関にまたがる自身の情報を【一元的に患者自身が管理・活用】できるPHRは、まさに「患者主体の医療」を実現する鍵であり、次世代の医療の形そのものです。

3. 利用者のメリット:エンゲージメント向上で、治療効果を最大化

県民・患者さまがPHRを利活用することは、医療・介護業界への信頼と、自身の健康増進に向けての積極的な参加を促すことになります。
★「自分の健康」への意識向上:様々なデータを可視化することで、患者さま自身の健康への関心が高まり、生活習慣の改善や治療へのモチベーション向上に繋がります。
★正確な情報共有:例えば自宅での血圧や血糖値のデータを、診察時に正確かつスムーズに医師へ提示できます。これにより、より良質な医療の提供が可能になります。
★切れ目のない医療の実現:PHRを利用すると、情報の管理の主体は患者さま本人です。転居やセカンドオピニオン、救急時など、どの医療機関にかかっても、患者さま自身の正確な医療情報を提供できるため、継続性のある安全な医療を受けられます。

4.医療の質と経営効率を同時に向上

PHR導入は、患者満足度だけでなく、医療介護現場にも直接的な利益をもたらします。
★診療の質の向上と効率化:診察前に患者様のPHRデータ(自宅血圧、生活習慣など)を確認できるため、問診時間を短縮し、より深い対話や診察に時間を充てられます。これにより、短時間で質の高い医療の提供が可能となります。

★患者中心のチーム医療の推進：医師、看護師、管理栄養士、理学療法士などが患者さまを中心としてPHR情報を共有することで、多職種連携が円滑になり、より効果的で一貫性のある医療・ケアを提供できます。
★慢性疾患管理の精度向上：生活習慣病などの継続的な管理において、これまで正確な把握が困難であった日常のデータに基づいた的確な指導が可能となり、進行・重症化予防に大きく貢献します。これは、将来的な医療費の抑制にも繋がります。
★「かかりつけ医」機能の強化：患者様の日々の健康状態を把握することで、単なる「病気を治す場所」から、「生涯にわたる健康を支えるパートナー」へと、役割を進化させることができます。

5. PHRが拓く、次世代ヘルスケアの姿

PHRの活用は、今後の医療のあり方を大きく変えるポテンシャルを秘めています。
★AIによる個別化医療：蓄積されたPHRのデータとAI（人工知能）を組み合わせることで、個人の将来の疾病リスクを予測し、個別化された予防プログラムや治療法を提案する「プレシジョン・メディシン（精密医療）」が現実のものとなります。
★シームレスな地域包括ケア：在宅医療や介護サービスとの連携がさらに密になり、患者様の情報を地域全体でリアルタイムに共有することが可能になります。高齢社会を支える、より強固な地域包括ケアシステムが構築が期待されますされます。

本事例の共有が、地域の病院にもお役立ていただき、よりよい医療環境づくりに貢献できれば幸いです。
我々は、医療現場全体のDX推進を通して、患者、病院、医療従事者すべてに対してプラスに働くよう、今後も取り組みを継続します。

＊内容について、さらに深く知りたい方は、
奈良県立医科大学　戦略的医療情報連携推進講座　までお問い合わせください。

Mail：spmic2024nmu@naramed-u.ac.jp

SPMIC

Dr.タマモンの
今月のひとこと

お盆休み。多くの診療所やクリニックが夏休みモードになる中、一部の病院に普段は受診していない患者が集中し、まるで「病院版の帰省ラッシュ」状態に。こんな時こそ、医療DXの出番です。PHRなどの技術で患者情報を迅速に共有できれば、負担も減り医療安全も保たれます。また、想定外の集中にも耐えられるよう、BCP（事業継続計画）を整備し、電子カルテのクラウド化や遠隔診療を備えることも重要。「お盆だからしょうがない…」を、「お盆でも大丈夫！」に変える。それが医療DXの勘どころです。